

明日

魯迅

井上紅梅訳

青空文庫

「声がしない。——小さいのがどうかしたんだな」

赤鼻の老拱ろうきようは老酒ラオチユの碗を手に取って、そういいながら顔を隣の方に向けて唇を尖らせた。

藍皮阿五らんひあごは酒碗を下に置き、平手で老拱の脊骨をいやというほどドヤシつけ、何か意味ありげのことをがやがや喋舌しゃべつて

「手前は、手前は、……また何か想い出してやがる……」

片田舎の魯鎮ろちんはまだなかなか昔風で、どこでも大概七時前に門を閉めて寝るのだが、夜の夜中に睡ねむらぬ家が二軒あった。一つは咸亨かんこう酒店で、四五人の飲友達が櫃台スタンドを囲んで飲みつづけ、一杯機嫌の大はしやぎ。も一つはその隣の單四たんし嫂子そうしで、彼女は前の

年から後家になり、誰にも手頼らず自分の手一つで綿糸を紡ぎ出し、自活しながら三つになる子を養っている。だから遅くまで起きてるわけだ。

この四五日糸を紡ぐ音がぱったり途絶えたが、やはり夜更になつても睡らぬのはこの二軒だけだ。だから單四嫂子の家に声がすれば、老拱等のみが聴きつけ、声がしなくとも老拱等のみが聴きつけるのだ。

老拱は叩かれたのが無^{むしよう}上に嬉しいと見え、酒を一口がぶりと飲んで小唄を細々と唱いはじめた。

一方單四嫂子は寶兒^{ほうじ}を抱えて寝台の端に坐していた。地上には糸車が静かに立っていた。暗く沈んだ灯火の下に寶兒の顔を照し

てみると、桃のような色の中に一点の青味を見た。「おみ籤くじを引いてみた。願掛もしてみた。薬も飲ませてみた」と彼女は思いまわした。

「それにまだ一向利き目が見えないのは、どうしたもんだらう。あの何小仙かしょうせんの処へ行つて見せるより外はない。しかしこの兎の病気も昼は軽く夜は重いのもかもしれない。あすになつてお日様が出たら、熱が引いて息づかいも少しは楽になるのだらう。これは病人としていつもありがちのことだ」

單四嫂子は感じの鈍い女の一人だったから、この「しかし」という字の恐ろしさを知らない。いろんな悪いことが、これがあるために好くなり変ることがある。いろんな好いことがこれがある

ためにかえつて悪くなり変ることがある。夏の夜は短い。老拱等が面白そうに歌を唱い終ると、まもなく東が白み初め、そうしてまたしばらくたつと白かね色の曙の光が窓の隙間から射し込んだ。單四嫂子が夜明けを待つのはこの際他人のような楽なものではなかつた。何てまだるっこいことだろう。寶兒の一息はほとんど一年も経つような長さで、現在あたりがハッキリして、天の明るさは灯火を圧倒し、寶兒の小鼻を見ると、開いたり窄すぼんだりして只事でないことがよく解る。

「おや、どうしたら好かろう。何小仙の処で見てもらおう。それより外に道がない」

彼女は感じの鈍い女ではあるが心の中に決断があつた。そこで

身を起して錢箱ぜにばこの中から毎日節約して貯め込んだ十三枚の小銀貨と百八十の銅貨をさらけ出し、皆ひつくるめて衣套かかしの中に押込み、戸締をして寶兒を抱えて何家かの方へと一散に走った。

早朝ではあるが何家にはもう四人の病人が来ていた。彼女は四十仙で番号札を買い五番目の順になった。

何小仙は指先で寶兒の脈を執ったが、爪つま先まさきが長さ四寸にも余っていたので、彼女は内心畏敬して寶兒は助かるに違いないと思つた。しかしなかなか落ちついていられないのでせわしく訊き始めた。

「先生、うちの寶兒は何の病いでしよう」

「この子は身体の内部が焦げて塞がっている」

「構いますまいか」

「まず二服ほど飲めばなおる」

「この子は息苦しそうで小鼻が動いていますが」

「それや火が金かねに尅こくしたんだ」

何小仙は皆まで言わずに目を閉じたので、單四嫂子はその上きくのも羞はずかしくなつた。その時何小仙の向う側に坐していた三十余りの男が一枚の処方箋を書き終り、紙の上の字を一々指して説明した。

「この最初に書いてある保嬰活命丸ほえいかつめいがんは賈家濟世老店こかさいせいろうてんより外にはありません」

單四嫂子は処方箋を受取つて歩きながら考えた。彼女は感じの

鈍い女ではあるが、何家と濟世老店と自分の家は、ちようど三角点に当たっているのを知っていたので、薬を買ってから家へ帰るのが順序だと思つた。そこですぐに濟世老店の方へ向つて歩き出した。

老店の番頭もまた爪先を長く伸ばしている人で、悠々と処方箋を眺め悠々と薬を包んだ。單四嫂子は寶兒を抱いて待つていると、寶兒はたちまち小さな手を伸ばして、彼女の髪の毛を攫つかみ夢中になつて引張つた。これは今まで見たことのない挙動だから、單四嫂子はそら恐ろしく感じた。

日はまんまると屋根の上に出ていた。單四嫂子は薬くすり包づつみと子供を抱えて歩き出した。寶兒は絶えず藻掻もがいているので、路は果

てしもなく長く、行けば行くほど重味を感じ、しようことなしに、とある門前の石段の上に腰を卸すと、身内からにじみ出た汗のため、きもの著物が冷りと肌ひやに触った。一休みして寶兒が睡りについたので見て歩き出すと、また支え切れなくなつた。するとたちまち耳元で人ひとこゑ声こゑがした。

「單四あねえ嬬子、子供を抱いてやろうか」

藍皮阿五の声によく似ていた。ふりかえつてみると、果して藍皮が寝不足の眼を擦りながら後ろからつ跟いて来た。こういう時に天將の一人が降臨して一臂びの力を添える事が、彼女の希望であつたのだらうが、今頼みもしないで出て来たのがこの阿五將だ。しかし阿五には一片の俠気があつて、無論どうあつても世話しない

ではいられないのだ。だからしばらく押問答の末、遂に許されて、阿五は彼女の乳房と子供の間に臂ひじを挿入さしいれ、子供を抱き取った。一刹那、乳房の上あたたが温く感じて彼女の顔が真赤にほてった。二人は二尺五寸ほど離れて歩き出した。阿五は何か話しかけたが單四嫂子は大半答えなかった。しばらく歩いたあとで阿五は子供を返し、昨日友達と約束した会食の時刻が来たことを告げた。單四嫂子が子供を受取ると、そこは我家の真近で、向うの家の王九媽おうきゆうまが道端の縁台に腰掛けて遠くの方から話しかけた。

「單四嫂子あねえ、寶兒はどんな工合だえ、先生に見てもらったかえ」「見てもらいましたがね、王九媽、貴女は年をとつてるから眼が肥えてる。いっそ貴女のお眼鑑めがねで見えていただきましょう。どうで

しょうね、この子は」

「ウン……」

「どうでしょうね、この子は」

「ウン……」

王九媽はいずまいをなおしてじつと眺め、首を二つばかり前に振つて、また二つばかり横に振つた。

家^{うち}へ帰つてようやく薬を飲ませると、十二時もすでに過ぎていた。單四嫂子は気をつけて様子を見た。いくらか楽になつたらしいが、午後になつてたちまち眼を開き

「媽^マ……」

と一声言つたまま元ののように眼を閉じた。睡つてしまつたのだ

ろう。しばらく睡ると、額や鼻先から玉のような汗が一粒々々に
じみ出たので、彼女はこわごわさわってみると、にかわ膠のような水が
指先に粘りつき、あわてて小さな胸元でなでおろしたが何の響も
ない。彼女はこらえ切れず泣き出した。

寶兒は息の平穩から無に変じた。單四嫂子の声は泣声から叫び
に変じた。この時近処の人が大勢集つて来た。門内には王九媽と
藍皮阿五の類、るい門外には咸亨の番頭さんやら、赤鼻の老拱やらで
あつた。王九媽は單四嫂子のためにいろいろ指図をして、一ひとさし串
の紙銭を焼き、また腰掛二つ、著物五枚を抵当かたにして銀二円借り
て来て、世話人に出す御飯の支度をした。

第一の問題は棺桶である。單四嫂子はまだほかに銀の耳輪と金き

著せの銀簪かんざしを一本持つているので、それを咸亨の番頭さんに渡し、番頭さんが引受人になつて、なかば現金、なかば掛で棺桶を一つ買い取ることにした。藍皮阿五は横合いから手を出して「そんなことは一切乃公おれに任せろ」と言つたが、王九媽は承知せず、「お前にはあした棺桶を昇かつがせてやる」と凹へこまされて、阿五はいやな顔をして「この糞婆め」といつたまま口を尖らせて突立つていた。そこで番頭さんがこの役目を引受けて晩になつて帰つて来た。棺桶はすぐに仕事に掛らせたから夜明け前に出来上つて来るとの返辞。

番頭さんが帰つて来た時には、世話人の飯は済んでいた。前にも言つた通り七時前に晚餐を食うのが魯鎮の慣わしだからだ。衆みな

は家へ帰つて寝てしまつたが、阿五はまだ咸亨酒店の櫃台スタンドに凭たよれて酒を飲み、老拱もまたほがらかに唱つた。

ちようどその時單四嫂子は寢台のへりに腰を卸して泣いていた。寶兒は寢台の上に横たわつていた。地上には糸車が静かに立つている。ようやくのことで單四嫂子の涙交りの宣告が終りを告げると、まぶた眇の辺が腫れ上がつて非常に大きくなつていた。あたりの模様を見ると実に不思議のことである。あつたことすべの凡てがあつたこととは思えない。どう考えてみても夢としか思えない。凡てがみな皆夢だ。あした覚めれば自分は寢床の中にぐつすり睡つていて、寶兒もまた自分の側そばにぐつすり睡つている。寶兒が覚めれば一声「媽マ」と言つて、活きた竜、活きた虎のように跳ね起きて遊びに

ゆくに違いない。

隣の老拱の歌声はバツタリ歇やんで咸亨酒店は灯火あかりを消した。單四嫂子は眼を見張っていたが、どうしてもこれがあり得ることとは信ぜられない。鳥が鳴いて東の方が白みそめ、窓の隙間から白かね色の曙の光が射し込んだ。

白かね色の曙の光はまただんだん緋ひこうしよく紅色を現わした。太陽の光は続いて屋根の背を照し、單四嫂子は眼を見張ったままぽかんと坐っていると、門を叩く音がしたので、喫びつくり驚して急いで門を開けた。門外には見知らぬ男が、何か重そうなものを背中に背負って、後ろには王九媽が立っていた。

おお、彼は棺桶を昇いで来たのだ。

半日掛りでようやく棺桶を蓋ふたすることが出来た。單四嫂子は泣いたり眺めたり、何がどうあろうとも蓋することを承知しない。王九媽達は面倒臭くなり、終いにはむつとして、棺桶の側そばから彼女を一思いに引剥がしたから、そのお蔭でようやくどたばたと蓋することが出来た。

しかし單四嫂子は彼女の寶兒に対して実にもう出来るだけのことをし尽して、何の不足もなかった。

きのうは一串の紙錢を焼き、また午前中には四十九巻の大悲呪を焼き、納棺の時にはごく新しい晴れ著ぎを著せ、ふだん好きなおもちやを添え——泥人形一つ、小さな木碗二つ、ガラス瓶二本——

―枕^{まくら}辺に置いた。あとで王九媽が指折り数えて一つ一つ引合せてみたが、何一つ手落ちがなかった。

この日藍皮阿五は丸一日来なかった。咸亨の番頭さんは單四嫂子のために二人の人夫を雇ってやると、一人が二百と十文大錢で棺桶を昇いで共同墓地へ行つて地上に置いた。王九媽はまた煮焚きの手伝いをした。おおよそ手を動かした者と口を動かした者には皆御飯を食べさせた。

太陽が次第に山の端に落ちかからんとする色合いを示すと、飯を食った人達も覚えず家に帰りたい顔色を示した。そして結局皆家に帰った。

單四嫂子はひどく眩暈^{めまい}を感じ、一休みすると少しは好くなった

が、続いてまた異様なことを感じた。彼女はふだん出遇わないことに出遇った。有り得べきことではないがしかも的確に現れた。想えば想うほど不思議になった。——この部屋がたちまち非常に森しんとして来た。身を起して灯火あかりを点けると室内はいよいよ静まり返った。そこでふらふら歩き出し、門を閉めに行った。帰つて来て寝台の端に腰掛けると、糸車は静かに地上に立っている。彼女は心を定めてあたりを見廻しているうち居ても立ってもいられなくなつた。室内は非常に静まり返つた、のみならずまた非常に大きくなつた、品物が余りになさ過ぎた。

非常に大きくなつた部屋は四面から彼女を囲み、非常に無き過ぎた品物は四面から彼女を圧迫し、遂には喘ぐことさえ出来なく

なつた。

寶兒はたしかに死んだのだと思うと、彼女はこの部屋を見るのもいやになり、ともしび灯火を吹き消して横たわつた。彼女は泣いているあの時のことを想い出した。自分は綿糸を紡いでいると、寶兒はそば側に坐つてういき茴香豆ようまめを食べている。黒目勝ちの小さな眼をみは瞠つてしばらく想い廻めぐらしていたが、「媽マ、父ちゃんはワンタンを売つたから、わたしも大きくなつたらワンタンを売るよ。売つたら売つただけみんなお前に上げるよ」といった。あの時はわたしも紡ぎ出した綿糸がまるで一寸々々皆意味があるように思われた。一寸々々皆生きていた。

だが現在どうであろう。現在のことは實際彼女に取つては何の

おもいで
想出の種ともならない。——わたしは前にも言ったが、彼女は
感じの鈍い女だ。感じの鈍い女に何の想出があらう。ただこの部
屋は非常に静かだ。非常に大きい。非常にガランとしているとだ
け、感じればそれでいいのだ。

しかし感じの鈍い單四嫂子も魂は返されぬものくらいことは
知っているから、この世で寶兒に逢うことは出来ぬものと諦めて、
太息といきを洩らして 独ひとりごと言をいった。

「寶兒や、わたしの夢に現われておくれ、お前はやっぱりこの土
地に残っていてね」

そこで眼をつぶって早く眠って寶兒に会おうとすると、自分の
苦しい呼吸がこの静かなガランドウの中を通過するそれがハツキ

り聞こえた。

單四嫂子は遂にうつらうつらと夢路に入いった。室内は全く森閑とした。

この時、隣の赤鼻の小唄がちようど終りを告げた頃で、二人はふらふらよろよろと咸亨酒店を出たが、老拱はもう一度喉を引搾って唱い出した。

「憎くなるほど、可愛いお前、一人でいるのは淋しかろ」

「アハハハハハ」

藍皮阿五は手を伸ばして老拱の肩を叩き、二人は笑ったり押合ったり揉み苦茶になって立去った。

單四嫂子はもう睡ってしまった。老拱等が出て行っただので咸亨

酒店は店を閉めた。この時魯鎮は全く静寂の中に落ち、ただこの暗夜が明日あすに成り変ることを想わせるが、この静寂の中にもなお奔はしる波がある。別に幾つかの犬がある。これも暗闇に躲かくれてオーオーと啼く。

(一九二〇年六月)

青空文庫情報

底本：「魯迅全集」改造社

1932（昭和7）年11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「愈々↓いよいよ 大凡↓おおよそ 却って↓かえって 位↓く
らい 呉れ↓くれ 極く↓ごく 此↓この 而も↓しかも 暫く
↓しばらく 其↓その 慥かに↓たしかに 只↓ただ 忽ち↓た
ちまち 丁度↓ちようど て戴く↓ていただく て仕舞う↓てし

まう 何処↓どこ 尚ほ↓なお 中々↓なかなか 殆んど↓ほと
んど 先づ↓まず 亦・又↓また 未だ↓まだ 丸で↓まるで
貰↓もら 漸く↓ようやく」

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（加藤祐介）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2004年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明日 魯迅

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 井上紅梅訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>